

徳田武著『江戸漢字の世界』

村山吉廣

この本は次の各章から成り立っている。

遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽／宇野明霞の訓法の悲劇／野村篁園の『罵蚊』詩と『淵鑑類函』／篁園詩注釈二首／『唐土名勝図会』典拠探原——とくに『万寿盛典』の図証を中心として／二つの『絵本漢楚軍談』と『西漢演義』／北里愍誠録』白話語彙出拠考——とくに『名物六帖』との関連において／読本と清朝筆記小説——『今古奇談』『通俗排悶録』について／『近世説美少年録』と『緑牡丹』

初出掲載紙は「明治大学教養論集」「漢文教育」「江戸文学」「近世文学と漢文学」「国語と国文学」「読本研究」などであり、他に未発表のもの二を含んでいる。いずれも一九八七年から九〇年にかけてのものである。

「あとがき」のなかで著者は次のように言っている。

ここ三年ほどに書いた論考を集めて「江戸漢字の世界」と題する。漢学漢詩文に関するものと小説の比較文学的研究とがほぼ半々を占めているが、それは私の関心が小説から漢学漢詩文に移ってきていることを示すかも知れぬ。

これまで読本を中心とした近世小説と中国小説の比較研究に主たる関心と精力を向けてきたのであったが、四十六歳を間もなく迎えようとするいま、関心が、詩人の人生とその反映である漢詩文とに移行してゆくのは、自然の成りゆきであろうか。おのずから学的探求心は漢詩文をも包摂する漢学にまで拡げられてゆく。

いずれにしても著者が近世知識人と漢詩文とのかわりに深い関心を持つ貴重な研究者の一人であることは論をまたない。以下、各項にわたって若干の紹介を試みたい。

「遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽」

遠山荷塘は文化文政期に江戸市中で小説『水滸伝』『金瓶梅』を講じたことで知られる。一名を一圭上人という。唐話学に秀いでいたわけだが、天保二年に三十七歳で世を去っている。その伝記には不明なところが多い。そこで著者は新たに『淡窓全集』と『亀井昭陽全集』から一圭に関する資料を抄出し、淡窓・昭陽との交渉の面からこの人の人物像を浮かびあがらせようとしている。煩をいとわぬ著者の作業量は多とするが、荷塘の史的位置づけにまで及んでもらいたかったという感がある。

「宇野明霞の訓法の悲劇」

明霞は元禄十一年に生まれ延享二年に四十八歳で死んでいる。主に京都で活躍した儒者である。徂徠を尊敬しその学風を京都に定着させるのに功があった。経学方面の業績のほかに『詩語解』『文語解』『詩家推蔽』等の著作があり、漢詩漢文における助字・虚辞の取扱いについて独自の見解を示している。著者はこれらを

分析して、その訓法の功罪について論じている。

明霞は「嘗」を「アリ」とよませていた。例えば「吾嘗終日不食、終夜不寝以思」論語（『文語解』巻一「嘗」の項）がそれである。この類の訓法はなじみにくいものであり、清田儼叟などからも帰一の定訓が得られなくて初学者を困惑させるものだという批判を受けている。しかし著者は諸例をつぶさに検討して「明霞の訓法が一見すると奇矯なようではあるが、実は広い用例の蒐集とそれから帰納された釈義に基づく、なかなか科学的なものである」と断案を下している。

しかしだからと言って著者は明霞の訓法が初学教育の方法として妥当だと言っているのではない。実際家である著者は訓法はあくまで原文理解のための便法であるとの立場にあり、意味はまた訓とは別に考えるべきだとしている。

「野村篁園の『罵蚊』詩と『淵鑑類函』」

篁園は天保十四年に六十九歳で亡くなっている。墓は駒込の養源寺にある。古賀精里に学び、いわゆる官学派の漢詩人である。填詞作家としての評価はすでに神田喜一郎氏によってなされている。

著者はこの篁園の詠物詩「罵蚊」（五言七十六句、全三八〇字の古詩）に用いられているおびただしい典故の由来に関心を持った。その上で著者はその最終的なよりどころが、『淵鑑類函』だったと結論する。

この書は清の康熙帝の勅撰で全四五〇巻、本来は詩賦をつくるためのものであったが、故事を検出するのに便である。ちなみに

舶載されたのは享保五年であり、「罵蚊」詩の作られたおよそ百年前のことである。けれどもまだ部数もすくなく書価も高額であった。こうしたなかで篁園は昌平黻御儒者として昌平黻の書庫からこの書を借覧することが出来た。著者によれば篁園はそのことによって作品に学問の裏付けを与え、「当代の多くの詠物詩のなかで一頭地を抜んでた豊富な学問性の保有を示そうとした」と言っている。これは作品の典故探索を通じて文学史上の一断面を明らかにしたものであり、今後の研究者にいくつかの示唆を提供している。「篁園詩注釈二首」についての紹介は省略する。

『唐土名勝図会』典故探原——とくに『万寿盛典』の図証を中心として」

著者の一年間の北京留学の思いもこめられている。「探原」というタームを使ったタイトルの文字にもそれがあらわれている。もともとは、ベリカン社刊のこの書に加えられた解説である。

『唐土名勝図会』の刊行は文化三年である。六卷六冊で多くの図版をのせ、北京およびその近在の城市・苑囿・郊坰・風俗について解説したものである。もちろん唐土の同類の書を利用して作られたものであるが、その出来栄えはよく、中国でも高い評価を得ているくらいである。

著者の出拠探原は丹念になされているが、著者はとくに康熙五十二年刊の『万寿盛典』とのかわりの深さに言及している。またこの図会の編者はふつう岡田玉山と信じられているが、著者は荒井鳴門説を唱えてその考証をしている。

「二つの『絵本漢楚軍談』と『西漢演義』」

元禄八年に刊行された『通俗漢楚軍談』は多くの通俗軍談の傑作として定評がある。したがってその後世への影響も大きいが、同時にその簡略版もいくつかわ作られている。著者がここにいう『絵本漢楚軍談』と『^{訂正}補刻 絵本漢楚軍談』の二つもそれである。

前者は阿部燦斎、後者は西洲散人の作であるが、この二書が『通俗漢楚軍談』の単なる焼直しではなく、原本の『西漢演義』を手元に置いての書き直しであり、その仕事ぶりがレベルの高い良心的なものであったことを実証している。その手法は著者の得意とする比較文学的考察に基き、ことに白話語彙や漢語の翻案の仕方の見くらべを十分に活用してなされている。これは中国演義小説を近世人がどのように受容したかを解く上での必須の操作を具体的に示すものであり、その解法には興味深いものがある。

『北里懲姦録』白話語彙出抛考

「読本と清朝筆記小説」

この二篇についての紹介は割愛する。

『近世説美少年録』と『緑牡丹』

馬琴が『美少年録』を執筆するに当って、中国白話小説『橋杭問評』と『緑牡丹』とを熟読し久しくその構想を練った事実はいく知られている。このうち前者の『橋杭問評』はたしかに粉本として利用された。その相互関係はすでに先人の指摘するところである。

しかし一方の『緑牡丹』が果して馬琴の作品にどのような影を落したかは未だ判然としていない。それはその歴然とした証跡を挙げるに至っていないからである。著者の論考はこの未解決

の問題に敢えて答を出そうと試みたものである。

著者の結論は「馬琴は『橋杭問評』の筋を『美少年録』の主筋として用い、『緑牡丹』はその脇筋として使われている」というところにある。その証跡は第二十三・四のストーリーに見出すことができる。著者はそれを逐一例示して解説してくれているが、要するにそこには両者の筋立てを融合させることによって、ストーリーをより刺激的にし、より魅惑的にしようとする馬琴の巧みな心意があるとしたものである。著者の資料の取扱いはたしかに説得力があり、『美少年録』成立事情に新たな要素の介在を附加したこととなる。

以上、この本の論考のテーマはさまざまであるが、短い年月の間にこのように次々と論考を発表していった著者の努力には大いに敬意を表したい。またこれらがいずれも先人のつみのこした問題であり、著者のこれらへのアプローチと成果としての新見は学界を裨益するところが少くない。ただ比較文学でいうところの adaptation や influence は原作の筋や仕組みをひきずりながら、原作とはかけはなれた相貌を呈し、別種の作品としての生命力を得て、はじめて意味をもってくる。したがって典拠や翻案の事実関係だけでなく、そこに生まれた作品の評価について一層ふみこんだ解釈が望まれる。

(平2・7 ぺりかん社 A5判 三〇〇頁 三八〇〇円)